The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代フランス語における疑問詞型感嘆文の研究
Author(s)	山本, 大地
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49481
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【4】

氏　　名	山本大地（やまもとだいち）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学位記番号	第　２２３９１　号
学位授与年月日	平成 20 年 6 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	**現代フランス語における疑問詞型感嘆文の研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　春木　仁孝 （副査） 教　授　由本　陽子　　准教授　井元　秀剛

論文内容の要旨

本博士論文では，疑問詞起源の文法マーカーを使用する感嘆文（以下疑問詞型感嘆文）を取り上げ，統語的，意味論的な特性の分析を通して考察を行った．その中でも特に特殊な振る舞いをする，quelという疑問詞マーカーを使用する感嘆文（以下*Quel...!*）を中心に扱った．

第一章では，本研究の分析対象に関して，基本的な統語構造の確認，言語レベルに関する特徴，感嘆のマーカーの歴史的起源といった一般的な記述を行った．主要な点を述べると，統語構造に関しては*Quel...!*は感嘆のマーカーが名詞に直接かかるのに対し，*Comme...!*, *Que...!*, *Ce que...!*, *Qu'est-ce que...!*におけるマーカーは文頭に置かれ，意味的な修飾関係をもつ形容詞や副詞は通常の位置におかれる．感嘆のマーカーの歴史的起源については，文法書や先行研究の記述から，本研究で扱うタイプの構文で使用されている感嘆のマーカーはほぼ疑問詞起源と考えることができ，やはり感嘆の意味には疑問詞の機能が大きく関係していることを指摘した．

第二章では先行研究を概観した．大部分の先行研究は，感嘆文が表現する独特の強調（量や質の高い程度）に焦点を当てている．感嘆文がこのような程度の高さを表現することは確かだが，そこから生じる以下の三つの疑問点を指摘できる．1.感嘆文が強意（高い程度）を表現するのであれば，それは通常の強意表現によって表現される強意とどのように異なっているのか，2.なぜ疑問詞を使用するのか，3.いくつか存在する疑問詞型感嘆文にはどのような差異があるのか．これらの問いに答える先行研究はなく，本研究で取り組む問題として位置付けた．

第三章では，疑問詞型感嘆文全体を特徴づけるという目的から，それによって表現される強意が，通常の強意語（特にtrès「とても」）によって表現される強意とどのように異なっているのかを考察した．その主張は以下の通りである．まず感嘆文の本質的な意味価値として，既存の表現では十分言い尽くせず，より高い程度を求める，という特徴があることを指摘できる．これは強意を含意した形容詞をいくつも連ねられるタイプの発話（例えば腐ったワインを飲んで：*Pfouah ! Infect ! Epouvantable ! Innommable ! Abominable !*「うわあ，まずい！ひどい！最悪だ！」）から理解できる．また，感嘆文の研究でしばしば挙げられる*Il a une patience...!*「彼の忍耐強さといったら！」タイプの感嘆文を例にとるなら，patience「忍耐強さ」という名詞に対する質的な限定（例えばextraordinaire「並外れた」等）を，まさに言わないことで言い尽くせないことを態度で示している．これらの発話の分析を踏まえると疑問詞型感嘆文も同様の捉え方が可能になる．疑問詞型感嘆文は，不定の値を表現する疑問詞を使用することで，問題となる性質・量の程度が，既存の強意語では十分言い尽くせないという態度を示している．それによって結果的に程度の高さが表現される．感嘆文が表現する強意が，通常の強意語と異なるのは，この点においてである．ただし疑問詞型感嘆文が他のタイプの感嘆文と異なる点は，それが感嘆を表現する構文として文法的に成立していることである．以上の分析内容から，疑問詞型感嘆文に見られるpouvoirの使用，反復，否定，疑問の不可能性といった特徴を説明することを試みた．

第四章は*Quel...!*型感嘆文を中心に，他の構文との対比において考察を行った．*Quel...!*は他の疑問詞型感嘆文とは異なり，その意味価値を単に強意と規定するだけでは十分ではない．それを端的に示す現象は，最上級の価値をもつ形容詞を使用できること，程度差を認める形容詞であっても使用できないものが存在することの二点である．よって*Quel...!*は他の疑問詞型感嘆文と並列的に論じることができない．本章の目的は，その違いが何によるものかを考察することである．本章は大きく分けて，三つの主張に分けることができる．

第一の主張は*Quel...!*に特徴的な意味価値が質それ自体を表現するというものである．これはその質的な意味を捉えやすい場合だけではなく（*Quel langage !*「なんて言葉遣い！」），性質の意味が名詞や形容詞によって表現されており，一見構文自体の質的な意味を捉え難い場合（*Quelle chaleur !*, *Quel beau ciel !*）でも，名詞や形容詞にかかる制限を通して同様に考えることができる．一例を挙げるなら，*Quelle chaleur !*「なんて暑さ！」は気温については可能であるが，フライパンの熱さについては容認されない．これは，前者の状況では想定できる「耐えられない（暑さ）」のような質的な意味が，後者の状況では考えられないことによる．

第二の主張は*Quel...!*における名詞の役割に関するものである．*Quel...!*という感嘆文では他の疑問詞型感嘆文と大きく異なる特徴としてquelという感嘆のマーカーが名詞にかかることが挙げられる．このような点に注目して考察すると，この名詞はクラスを同定する機能を有することが明らかになる．この主張を支える根拠としてまず*Quel...!*に発見のニュアンスを伴うことが挙げられる．発見のコンテキストではまずそれが何かを認識することが重要なのであり，クラスを同定する*Quel...!*と親和性が高いといえる．そして一時的な属性を表す形容詞を使用することができないことも同様の観点から説明できる．何かをクラスへ位置付ける，範疇化を行うということは，あるものがどういうものであるのか，定義できるような，本質的な特徴を述べることである．しかし一時的な属性とは，ある一時に付与される偶発的な特徴であり，ある対象を本質的に特徴づけるようなものではない．それに対し，恒常的属性はまさにその対象を定義するような本質的属性であるため使用可能なのである．また，固有名詞を使用できないことについても，同様の観点から，固有名詞は通常直接個体に結びつく名詞であり，クラス概念を表さないためと簡潔に説明できる．

このように考えると*Quel...!*が単に質を表現していると考えるだけでは十分ではないという結論に至る．そこで，以上の二点を踏まえて，*Quel...!*は名詞が表す概念の典型から逸脱した事例を表現することを主張した．これが第三の主張である．このように考えることで，通常の具象名詞であっても容認性が低い場合を説明することができることを主張した．例えば*Quel dimanche !*「なんて日曜だ！」に比べ*Quel lundi !*「なんて月曜だ！」の容認性が低いのは，月曜日の典型をうまくイメージできずそそこから逸脱するということがどういうことが理解し難いためである．

最後にこの主張の反例として肯定的評価を表現する場合をどのように捉えるかについて議論した．例えば肯定的な意味で*Quel spectacle !*「なんてショーだ！」と述べた場合，このショーはすばらしいものであり，真のショーだと理解できる．よって典型から逸脱しているというよりも，むしろショーの典型的事例として捉えられてしまう．そこでこの問題を解決するために，定冠詞つき名詞句が「本物の」という解釈をうける用法と比較を行った．その結果，定冠詞つき名詞句の「本物」を表す用法は確かに「本物の」という意味であるが，*Quel...!*についてはやはり「並外れた」という意味合いが強く，典型からの逸脱という仮説は有効であると結論づけた．またここでの議論から，「典型」と呼ぶものには実は「本物」と「凡庸」の二種類のタイプがあるという可能性を示唆した．

第四章では，引き続き，*Quel...!*に焦点をあて，疑問文との関連から論じた．quel＋名詞は，他の疑問詞型感嘆文と異なり，感嘆文と疑問文がまったく同一の形式で表現されることが可能であり，それを考慮してもこの両者が近い関係にあることがわかる．この章での主な主張は，疑問文においては名詞句が一般にもつ指示機能と記述機能の両面が見られるのに対し，感嘆文においては記述的な機能のみが見られるということである．例えば*Avec quel homme t'es-tu mariée ?*「どんな人と結婚したの？」という疑問文には，二つの解釈が可能である．一つはJeanやPierreといった返答が適切な指示に関わる

用法でありこれが指示機能に当たる．もう一つはUn bel homme / Un homme riche.「かっこいい人/お金持ちの人」といった答えが適切となる質に関する用法であり，これが記述機能にあたる．一方感嘆文 *Quel homme!* 「なんて男！」は男の性質を問題とする質の解釈，つまり記述的な解釈しかない．このことから，感嘆文は本質的に，どのように述べるかという記述性を問題とする発話形式であると結論づけた．

以上の分析を通して，本研究では，感嘆文という表現形式全体に対する理解を深めるとともにフランス語における疑問詞型感嘆文がどのような仕組みでその意味価値を表現するのかを論じた．

論文審査の結果の要旨

山本大地氏の学位請求論文「現代フランス語における疑問詞型感嘆文の研究」は、現代フランス語において疑問詞と同じ形式を用いる感嘆文全体を概観した上で、それぞれの構文の特徴と問題点を検討し、中でもその振る舞いに特徴がある quel という疑問詞を用いた感嘆文を詳しく分析して論じたものである。

この分野は、他の言語研究におけるのと同様、フランス語研究の分野においても先行研究が少なく、その数少ない先行研究もいまだ記述的なレベルにとどまっていたり、特定の問題だけを扱っている場合が多い。故に、感嘆文に関してはまだまだ明らかにすべきことが多くあると同時に、一方で指針となる研究も少ないというのが現状である。山本氏がそのような未開拓の分野に果敢に挑戦した点は評価に値する。しかしそれはまた、問題解決のための道具立てや理論的基盤をほとんどゼロから構築しなければならないという困難さもあることになり、山本氏の論文においても、論文中で使われている概念のさらなる明確化が必要である点が諮問にあたった委員からも指摘された。

中でも quel 型感嘆文に見られる形容詞との共起制約に関して、そこで用いられている形容詞の分類に関していくつかの問題点が指摘されたが、今後さらに検討を加えていく必要があると思われる。また、quel 型感嘆文が「典型」からの逸脱を表すという説明に関して、論文中で 2 種類の「典型」という概念が用いられている点に対して、再考を促す指摘がなされた。

全体的な評価としては、先にも述べたように未開拓の非常に興味深いテーマに取り組んだ点が先ず評価に値する。「感嘆」という極めて主観的な領域に対応する構文の意味論に取り組み、これまであまり知られていなかった構文間の違いや、quel とともに用いられる形容詞の制約などを明らかにした意義は大きい。特に、他の疑問詞型感嘆文が程度の高さにかかわるのに対して、quel 型感嘆文が質にかかわるとして詳しく分析している点は quel 型感嘆文についての理解に大きく寄与したものとして高く評価できる。論文中にはそれ以外にも興味深い指摘も多く見られ、また用例も豊富であり、今後の発展が期待される。今後は quel 型以外の感嘆文についてもより踏み込んだ分析をして、疑問詞型感嘆文全体についての研究に発展させることを期待したい。

今後の課題もいくつかあるが、当論文がフランス語の疑問詞型感嘆文の研究に対して、大きな貢献をなしたことは明らかである。

以上のように、当論文は博士（言語文化学）の学位請求論文として十分価値のあるものと考えられる。